

女子大國文

第百五十五号

平成二十六年九月発行

女子大國文 第百五十五号

平成二十六年九月発行

京都女子大学国文学会

女子大國文

第百五十五号

平成二十六年九月十五日 印刷
平成二十六年九月三十日 発行

〒605-8585 京都市東山区今熊野北日吉町五番地
編輯兼 発行者 京都女子大学国文学会

電話 〇七五-五三一九〇七六
FAX 〇七五-五三一九一三〇
振替 〇〇〇〇-五三一三一四

〒605-8585 京都市上京区上長者町通黒門東入
印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇七五-四四一四一〇八代
FAX 〇七五-四四一六二八二

泉鏡花「外科室」の口絵…………… 峯村 至津子(一)

——「外科室」注釈序章——

泉鏡花「高野聖」論…………… 泉 由美(三)

——典拠としての『鳥留好語』——

猪熊本『令義解』の訓点…………… 西崎 亨(五)

〔資料紹介〕

一紙書き教訓四題——一地方の一家の支え…………… 八木 意知男(八)

新刊紹介 豊島修著『熊野信仰の世界

——その歴史と文化——〕…………… 中前 正志(九)

彙 報…………… (一〇)

京都女子大学国文学会

彙報

○春季公開講座出席者の感想文、優秀論文発表者の卒論要旨と在学生へのアドバイス、優秀論文発表会出席者の感想文、新入生歓迎行事の感想文など、盛りだくさんに掲載してあります。

研究室だより

○長年にわたり本学国文学科に勤務され、ご尽力をいただいた工藤哲夫先生が、本年三月を以てご退職になりました。先生のみますますのご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。卒業生・在学生の皆さん、および峯村至津子先生より、工藤先生の思い出の記をお寄せいただきました。

○替わって四月より、新任として、宮崎三世先生をお迎えいたしました。主に太宰治や石川淳の作品をご専門とされる新進気鋭の先生です。宮崎先生より、ご就任の辞の玉稿をいただきました。

○昨年度一年間、法政大学において国内研修をされていた川島朋子先生が、この四月よりお戻りになりました。

○平成十七年四月より平成十九年三月まで本学に勤務され、国語

学のご指導にあたられた小林賢次先生が、昨年六月二十九日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。奥様の小林千草様（国語学者でおられます）より、先生御夫妻による御共編著『日本語史の新視点と現代日本語』（平成二十六年三月 勉誠出版）をご寄贈いただきました。心よりお礼申し上げます。

○本年度の文学部国文学科主任兼国文学会代表幹事は坂本信道先生で、普賢保之・峯村至津子両先生とともに、学科・国文学会の運営にあたっております。

二〇一四年度国文学会行事（前期）

○新人生オリエンテーション

四月四日（金）午後一時半より 於J224教室

○春季公開講座（大学と共催）

五月九日（金）午後二時四十五分より 於J420教室

講題 京都と蕉門俳諧―三つの俳諧遺跡をめぐる―

講師 佐賀大学名誉教授 田中道雄先生

○優秀論文発表会

五月十日（土）午後一時より 於J420教室

〈卒業論文〉

・『源氏物語』紅葉賀巻の贈答歌と『萬葉集』の

影響関係について

―額田王と大海人皇子の唱和歌の受容史を中心に―

木本 有香氏

・天正狂言本『ふくろふ』における〈あくび〉

駒田 さな氏

・泉鏡花の唄に関する書誌的研究

芳賀祐紀子氏

・芥川龍之介の児童文学―区分と姿勢について―

小澤優里子氏

なお、木本氏は、当日やむをえぬ事情でご欠席でしたが、木本氏の卒論を指導された坂本先生に、木本氏の卒論の概要をお話いただきました。

○新人生歓迎行事 能楽鑑賞会

五月三十一日（土）午後一時より

於音楽棟2階演奏ホール

着付・囃子に関する解説拝聴、小鼓・大鼓体験、狂言『寝音曲』、能『橋弁慶』鑑賞

○国文学会学会旅行（春季）

「梅雨の古都を歩く」六月二十九日（日）午前十時より

行先、東大寺・手向山八幡宮・春日大社など。

参加者、坂本・普賢・峯村先生、学生十六名。

参加者の感想文は、次号156号に掲載予定です。

工藤先生の思い出の記

工藤ゼミで学んだことを実社会で活かす

— 宗教カルト脱会の体験より —

昭和六十三年度卒業 杉 浦 貴 子

特に文学少女でもなく、明確な目的意識もない私でしたが、思春期特有の「自分とは何者か」という自己への問いの活性化に、漠然と「中世」の仏教文学を学びたいと思っていました。そして京都女子大学に進学したのですが、工藤哲夫先生の「宮澤賢治ゼミ」の存在を知り、賢治の持つその宗教性に惹かれ、迷わず「近代」の工藤ゼミを選択しました。

お世辞にも真面目な学生だったとは言えませんが、ゼミで染付いた工藤先生の教え、

一、必ず原典にあたる。孫引きをしてはならない。(むろん剽窃は以ての外である。)

二、孫引きがいけない理由(の二つ)は、当該引用文が筆者にとって都合の良い部分のみ(前後の文章を見ると論旨が違う)を引用している場合があるからである。

三、辞書は必ずしも正しくはない。(複数の辞書を見比べるべ

し。)

が、後々に危機から私を救い出しました。

卒業して数年の後、知人に誘われ、とある「場所」へ行くと、そこは楽しい雰囲気の中で、「手相」診断があつたり、「家系図」の説明を受けたりしながら、「今の貴女に先祖を救う責任・使命がある」「本当に大切なことを学びましょう」と、ここで続けて学んでいくことを勧められました。マザー・テレサなど偉人のビデオや、『天地創造』などの映画を見て感想を言い合いながら、「幸福をつかむ」「あの世とこの世」「恨みを越えていく道」「真の愛・偽りの愛」と、一対一の講義は進んでいき、『聖書』の内容に触れることが多くなつていきました。

「人類には原罪があり、その原因は始祖であるエバがヘビ(墮落した天使：ルーシエル天使長)の誘惑に負けて淫行を行いアダムも巻き込んだため、罪の根(原罪)が子々孫々に遺伝することになり、罪人たる人類の悲惨な歴史が延々と繰り返されている」と『創世記 2:3』、『箴言 1:31:2』、『黙示録 22:14』を示されました。講師は「ノートを取るな」と言いましたが、ノートを取り『聖書』で引用部分を確認したところ、前後の文章を見ると全く論旨が違い、書かれた時期も場所も、書いた人も全く異なる書の言

葉の断片を拾い集め、意図したストーリーを作り上げており、「そのようなことは『聖書』には書かれていない」と指摘すると、「奥義は簡単には明かせない」と逃げられ、不審に思い調べてみると、そこは違法な手法で資金を集めている、あるカルト的な団体でした。

この集団や教化システムへの依存性がどんどん高まる仕組みになっており、その団体名が知らされることはありませんでしたが、「原典にあたれ！」によって、自ら気付き洗脳プログラムから脱出することが出来ました。

近年、インターネットなどの発達で便利になりましたが、自分の目と耳と…五感と全身で確かめる作業を怠らず、学問・研究ではもちろんのこと実生活においても、工藤ゼミで学んだ姿勢をもって、常に課題に対峙していきたいと思います。工藤先生には人として生きていくために大切な事を教えていただき、心より感謝申し上げます。

工藤先生の思い出

平成三年度卒業 茂田(旧姓吉河)恵子

まず工藤先生には、この度ご定年をお迎えになられましたことを心よりお祝い申し上げます。

私が工藤ゼミ生だったのはなんと二十五年も前のことになりましたが、ゼミでの先生の容赦ない突っ込みで冷汗をかいたことも、仲間たちの白熱の議論に「皆やるなあ！」と目を丸くしたことも、先生を交えてのゼミコンパが楽しかったことも、何もかもつい昨日のこのように思えてなりません。

ゼミでは、参考文献の探し方、読み方に始まり、引用の使い方、論文を書くにあたっての心構え、ルールにいたるまで、基本中の基本をしつかりきっちり叩き込まれました。

「剽窃は絶対にしてはならない」ということはイの一番に教わりましたし、「引用は正確に！」の言葉に至っては、一体何回言われたことか分かりません。うっかり孫引きをしようものなら、出典を明示せずにレジユメを作ろうものなら、たちまち先生の厳しい追求とダメ出しにあったものでした。

それはつまり「自分の言葉に責任を持ち、誠実な態度で研究に臨め」というお教えであったと思います。社会に出る前の若い時期に「自分の言葉に責任を持つ」ということを叩き込んでいた我々は、幸いでした。

ゼミでは厳しかった(?)先生ですが、コンパの時にはビールを片手に専ら聞き役に回られ、皆のお喋りに「ほう、なるほど…。」と興味深げに耳を傾けておられました。時々、「ん?ちよっと待

てよ。君の今までの話からすると〇〇は××ということだが、今の発言からは〇〇は△△ということになる。つまり矛盾しているようだが、それは？」とゼミさながらにつっこまれることもありましたが、そんなやり取りも工藤ゼミらしくて楽しかったものです。

工藤先生にお教えたことと、素敵なゼミ仲間たちに出会えたことは、大学時代に得た私の誇りであり宝物です。四回生の最初のゼミの日、先生はこう言われました。「新見、創見を君たちならそれが出来る頭を持っているはずだ。」と。この言葉に込められた先生の期待と厳しくも温かいそして優しい眼差しを、子を持つ身となった今、改めて感じているような次第です。工藤先生には、これからも元工藤ゼミの我々（いつの間にからおぼちゃんですが）を、お見守りいただけますよう。そして、いつもの工藤節（失礼ながら仲間うちでそう呼び慣わしております）、その中でも皆が一番好きな「また遊びに来給え」を、今後もお聞かせいただけますようお願いしたいと思います。

工藤先生には、大変お世話になりました。ゼミの皆を代表して、心からのお礼を申し上げます。本当に有難うございました。

最後になりましたが、先生の今後のご健康とご多幸をお祈りいたしております。

工藤哲夫先生の御退職を祝して

平成十三年度卒業 稲垣裕子

工藤先生、このたびは御退職まことにめでとうございます。先生に初めてお目にかかったのは、学部二回生で受講した国文学概論でした。先輩方からは「儼乎たる師」「謹厳重厚で個性的な研究者」ともつばらの評判で、本気で近代文学を学ぶつもりならば是非に（ただし、夏期休暇前の五、六時間連続集中講義は尋常でなく辛ければね）と満面の笑みを浮かべながら勧められたものです。

実際、国文学概論では島崎藤村の「春」と「家」を中心に、その創作過程について著者と友人らの書簡や日記、膨大な関連資料を参照しつつ、非常に緻密な実証方法を御教授くださいました。結果、藤村が述べる創作日の矛盾点が明らかとなり、作者の言葉といえども、必ずしも絶対のものではない、と知ることが叶いました。その検証過程は、あたかも推理小説の謎を解くかのようにスリリングで、本当に面白かったことを覚えています。また、定説と語られている論も、一度は自ら検証する必要性がある、と実感できたのも先生の御講義を受講したおかげです。以来、私は研究者として常に客観的で、堅実な論証に努められる先生の御姿勢に、すっかり傾倒してしまいました。

もちろん、私は三回生ゼミ・四回生の卒論ゼミともに、工藤先生のお世話になることとなり、厳しくも温かい御指導をいただけました。その御指導の中で、今でも鮮明に思い出せる逸話があります。あれは三回生のとき、確かC校舎でゼミ発表があったのですが、発表者が調査内容について、うる覚えの情報を確信のないまま発表してしまいました。工藤先生は大変お怒りになり「いや、そんなはずはない。ちよつと待っていないさい」と、先生の研究室があるJ校舎の四階まで！情報源の全集を取りに戻られたのです。ゼミ生の皆は一斉に青ざめ、発表者もおどおどするばかり。やがて戻って来られた先生は、開口一番「ほら、ここを見ろ」と発表者に全集を突き付けました。案の定、その発表内容は勘違いだったのですが、発表者はぐうの音も出ず、ひたすら謝罪するのみでした。それからというものの発表担当になったときの緊張感、並大抵のものではありません。入念にチェックをして発表に臨んでも、先生には必ず不勉強な部分を見つけられました。私たちゼミ生は、何事にも手抜きすることない先生のお姿に、畏敬の念を覚えること度々でした。

現在、私は先生から御指導たまわった研究者としての姿勢を肝に命じ、大阪府立大学客員研究員として近代文学研究の道を邁進しております。学部での密度の濃いゼミは、外部受験した大学院

での私の研究生活を支え続けてくれました。また、学位取得後も陰になり日向になり「どのような苦悩も文学研究の糧となる」無駄なものは何もないと、叱咤激励してくださった先生の御厚情に心よりお礼申し上げます。どうか今後も、教育・研究の先頭に立たれ、私たちを御指導いただければ幸いです。今年もまた、夏期休暇にお会いすることを楽しみにしております。

二つの顔を持つ先生

平成二十四年度卒業 湊 川 智 世

工藤先生との「思い出」の執筆というとてもありがたい依頼を受け、最初に頭に浮んだのは一方的な私のサークルでの思い出だった。先生は長年落語研究会の顧問を務められており、実の所私にとつては三回生から工藤ゼミに参加するまでは「国文学科の先生」というよりも「落研の顧問」としての印象が強かった。忘れもしない初めての藤花祭で、舞台の一番端の席に座って大喜利に参加していた私のすぐ目の前に先生は座っておられた。緊張するなどと言う方が難しいその環境の中、一体自分がどんな回答をしたのかはさっぱり思い出せない。しかしどつと疲れたその日、私を癒してくださいだったのもまた工藤先生だった。毎年恒例として先生は私達部員にたくさんの美味しい和菓子差入れしてください

ており、歴代の落研部員にとつてそれは忘れられない味となっている。

また顧問としての先生について、特に印象深かったのは最終学年の引退と新幹部のお披露目を同時に兼ねる寄席でのパンフレットのことだ。先生はそこで毎年新旧幹部の面々の紹介文を書いてくださるのだが、それがユーモアに溢れていて実に面白かった。私達のことをよく見てくださっているのだなと感じ、紹介をされた当人でもないのに照れてしまうこともあった。部員は皆楽しみにしており、パンフレットが刷り上がるとすぐに読んで引退を寂しがると同時に新しい世代へ期待を膨らませて笑い合った。恐らくこんな風に先生の文章を楽しませてもらったのは、広い京女の中でも落研部員が一番だったのではないかと思う。そして文章といえは、寄席では毎回演目の内容に対して観客にアンケートを書いてもらっているのだが、貴重な先生のアンケート用紙はそれはもう大人気であった。鋭い意見、そしてたまに飛び出るお茶目なコメントを回し読みながらきやあきやあ騒いでいたことを今でもはっきりと覚えている。先生がいなければ私達はこんなに楽しいサークル活動を続けることはできなかっただろう。

そうやって私は思いがけず大学生生活の四年間ずっと先生と接点を持っていたのだが、何よりお世話になったのは二年間所属させ

ていただいたゼミのことだった。文学研究のいろはも分かっていたいなかった私にとつて、とことん自分だけの力で答えを突き詰めさせる先生の方針は初めひたすら難しく感じ、こんな調子で卒論が書けるのかと不安に思っていた。しかし一つの引用文について徹底的に調べ尽くすことを繰り返す内に、私は参考文献にも載っていない情報を自らの力で発見する喜びを知ることができた。妥協を許さない先生の研究に対する姿勢を学び、卒論執筆を心底楽しむことができて私は幸せだった。講義中はびしりと厳しい先生と、打って変わって京都の街で和やかにお酒を飲んだ思い出も忘れられない。

改めて思い返せば、私の京女での充実した生活の中には常に先生がおられた。どれだけ感謝の言葉を述べても足りないだろう。工藤先生、長い間本当にお疲れ様でした。先生の未永いご多幸を、心よりお祈り申し上げます。

工藤先生への憧憬

三回生 出水 雅子

工藤先生に初めてお会いしたのは一回生の時、入学してすぐの新入生オリエンテーションでした。その時は終始しかめ面してらっしゃるなあ、全然笑わない方だなあ、厳しそうだなあ、と、

マイナスな印象ばかりが先に立っていた記憶があります。

オリエンテーションが終わった後、先生についての噂を周りの友人たちが話しているのを度々耳にしました。それはどれも先生が非常に厳格な方だというものばかりでしたので、当時は少し近づきにくいと感じていました（先生ごめんなさい）。

そんなイメージが誤りだと気付いたのは講義を受け始めてからでした。先生は確かに厳しく学生を注意されることもありましたが、しかしそれはいつも必ず注意される学生の側に非があつてのことであり、少なくとも私が見た中で理不尽な対応を強いていることは一度もありませんでした。

それどころか先生は学生のことを非常に大切に思つてらつしやるといふこともだんだんと分かつていきました。二回生後期のゼミの初回の時に、講義を受ける際の注意で居眠り厳禁だという通達をしていたのに、居眠りをしてしまった学生がおり、私は先生が激怒されないか少しドキドキしながらその様子を見守つていました。すると先生は注意をすることもなく、講義が終わった後で私に「〇〇（居眠りをしている学生の名前）は大丈夫か、藤花祭で出すサークルの展示の準備で疲れているのか。」と声をかけてくれました。その言葉から先生の学生に対する愛情、優しさを感じ、その時は今までのイメージとのギャップに驚いた記憶があ

ります。

また、ずっと寡黙な方だと思つていたのですが、先生は饒舌で、よく笑う方であるということ、気さくでお茶目な方だということも、先生の講義を受講していくうちに分かつて正直驚きました。それから先生は何事にも真摯に向き合う方でした。加えて曲がったことがお嫌いでしたので、真面目すぎる、と感じた学生も居たかとは思いますが、私はそういったところを含めて心から先生を尊敬していました。

そのため先生が定年退職で学校を辞められると聞いた時にはショックでしばらく受け入れることができませんでした。先生が最後の講義の時、「できれば君たちが卒業するまで居たかった」と話されたときには、先生も名残惜しく思つてくださったのだと分かり、最後まで私たち学生のことを考えてくださったというお気持ちが本当に嬉しかったです。

入学当初の私のように先生について誤つた印象を抱いたままの学生がいるかもしれませんが、先生は（良い意味で）ギャップをお持ちの先生でした。図々しいですが、この作文で先生への誤つた印象を少しでも払拭できればと思います。

先生にお世話になったのは二年間という非常に短い間でしたが、その間に教わったことは多く、感謝してもしきれません。先

生が京都女子大学で教えた最後の学生の一人になることができたのは私の誇りであり、先生に教えていただいたことは学校を卒業して、社会人になっても、家庭を持つても胸に抱き続けたいと思います。先生、本当にありがとうございます。

工藤先生との十六年

峯 村 至津子

今年の三月、国文学科の研究室が並ぶ馬町のJ校舎の四階は一際賑やかであった。卒業生の方々が入れ替わり立ち替わり来学され、工藤哲夫先生のご退職を惜しんで同窓会が幾つも催されてきたからである。この出来事一つを見ても、先生が如何に学生たちから慕われ卒業後もあたたかい交流を結ばれていたかが窺える。先生の在職中は、長期の休暇ともなると卒業生のグループが何組も来訪し、先生を囲んで何時間も共同研究室で歓談されている様子をお見かけしたものである。工藤先生は極めて話題が豊富で、難しい時事問題から芸能界のゴシップに至るまで様々なことに通じておられた。そして、年下の者に対しても高圧的な物言いをなさったり見下したりということが全くない方であり、他人の話によく耳を傾ける方であった。あのように真面目一方に見られながら（先生が歩かれる際、廊下や道路の角を直角に曲がられるという噂を、

私は着任前、未だお目にかかったことがなかった頃に耳にしていたくらいであったが）、世の中の常識に囚われない自由なところがあって、私とは十九歳の年齢差であったが、先生とお話しして、年の差というものを感じたことがない。あのように学生たちから慕われたのも頷けるのである。

語学が堪能で（学生の頃に培った力を衰えさせぬよう、ずっと英語の本を読むことを続けておられると伺ったことがある）、車の運転やパソコンの操作など機械をいじることに長けておられ、格闘技がお好きで、テレビドラマはすべて御覧になっているほどで、雑学の知識豊かで（かつてものもらいを瞬時にして治す方法を伝授していただいたが未だ実践できていないのが残念である）、先生の興味・関心はまさに多岐にわたっていた。長期の休みと言えば、近年は先生が発案企画命名された「勝桶かつおけ」なる催しが決まって開催されるようになった。これは先生が愛好されている昔の歌謡曲や童謡を、音楽教育学専攻の荒川恵子先生の御指導の下、国文学科の高橋勝忠先生のギター伴奏によつて参加者全員で唱和するというものである。着任以来私は工藤先生の優しいお人柄と事務仕事などを迅速にこなしてくださることに甘えきつて我が儘いっぱいに過してきたので、少しでも恩返しできればといった孝行心のようなものも流石に芽生えてきていた矢先、この会へのお誘いがあったの

どうかうかと参加してしまったのであるが、初回の催しでは昼食も早々に歌い始め、結局午前十一時半頃から夜七時過ぎまで歌い続けるはめになった時には恐慌を來した。その過酷さたるや、噂を聞かれた中前教授をして「次回開催日を是非教えてほしい。その日は絶対にこの校舎に近づかないようにするから！」と言わしめたほどである。「自他共に認める音痴」というのが工藤先生御自身の自己分析だが、歌への情熱はなかなか恐れ入ったものがある。

また、先生はお料理が得意で、美味しい他人丼の作り方（詳細は忘れてしまった）や酢豚の作り方（大きめに切った生のパイナップルと、素揚げしたさつまいもを入れる）を教えていただいた。せっかく御教示いただいたのに、私が無精で料理をしないためにその知識は宝の持ち腐れとなり、まことに忸怩たる思いである。年末には御自身で柑橘類を吟味されて出汁入りのポン酢を作っておられ、それをいただいて水炊きを食すのがこの十五年、毎年冬の樂しみであった。旅行嫌いで新幹線には乗らない（理由は不明）とか牛乳は飲まない（なぜなら牛乳は牛の子どもが飲むべきもので人間の大人が飲むものではないから）などとといった妙なルールを決めておられたり、偏屈なところもおありではあったが、そういったところも巧まずしてユーモアに溢れていた。先生は、常に好奇心旺盛な

若々しい精神の持ち主であられたと思う。この大学の小さな研究室の中で毎日を過ごしても（先生は授業のない土日も必ず出校しておられた）楽しく生きていく術を教えていただいたと思っている。

研究方法について、作品の読解について、意見を戦わせたのも楽しい時間であった。先生とは作品の趣味は随分違ふところもあり、私が愛読してやまない堀辰雄などには先生は興味を示されなかつたし、私が一時期夢中だった尾崎翠なども、「何が「第七官界彷徨」か！あの作品のよいところはタイトルだけだ！」と罵倒されていた様子なども今この文章を書きながらありありと蘇り、ほんとうに楽しい思い出は尽きない。先生が研究者でありながら一読者としての初々しい感動を宮澤賢治の作品に持ち続けておられるあたりも眩しかった。「祭の晩」「茨海小学校」など先生が愛でておられた作品を朗読して聞かせてくださったことも懐かしい。先生がお好きだとおっしゃっていた八木重吉の詩のことなどまだまだ書き足りないことが多いが紙面も尽きた。振り返れば瞬く間に過ぎ去ってしまったように思える、この十六年であった。工藤先生、長年御世話になりほんとうにありがとうございます。先生のような方が同じ分野の年長者で私は幸せだったと思います。これからも先生がお元気で楽しく第二の人生を歩まれることをお祈りします。

宮崎先生の就任の辞

文学作品の語りを記述する

宮崎 二世

就任のごあいさつとして、私が小説のテキストについて考えてまいりましたことを少しばかり述べさせていだきたいと思えます。話題として太宰治『道化の華』(『日本浪漫派』昭和十年五月)を取り上げます。

文学作品のテキストは、詩であれ、散文であれ、いかなる文学作品もそれぞれの仕方です。読者にテキストに集中することを求めています。それに応えるには、テキストが求めている読み方を讀み取らなければなりません。たとえば『道化の華』のテキストが、独自の仕方です。さらさらの注視を要求している様子を読んで見ましよう。

「ここを過ぎて悲しみの市。」

友はみな、僕からはなれ、かなしき眼もて僕を眺める。

友よ、僕と語れ、僕を笑へ。ああ、友はむなしく顔をそむける。友よ、僕に問へ。僕はなんでも知らせよう。僕はこの手もて、園を水にしづめた。僕は悪魔の傲慢さもて、われよみがへるとも園は死ね、と願つたのだ。もつと言はうか。

ああ、けれども友は、ただかなしき眼もて僕を眺める。

大庭葉蔵はベッドのうへに坐つて、沖を見てゐた。沖は雨でけむつてゐた。

夢より醒め、僕はこの数行を讀みかへし、その醜さといやらしさに、消えもいりたい思ひをする。やれやれ、大仰きはまつたり。だいいち、大庭葉蔵とはなに「ことであらう。酒でない、ほかのもつと強烈なものに酔ひしれつ、僕はこの大庭葉蔵に手を拍つた。

この作品では、大庭葉蔵という名を与えられた人物にまつわる三人称語りの物語に、その物語の書き手である「僕」という一人称の語りがわり込んできます。「僕」が入ってくるやいなや葉蔵より前景に「僕」が立ち、両者の比重が逆転します。すべては一人称語りの枠の中に回収されざるをえないからです。

葉蔵の物語に入ってくる書き手「僕」は、作者・太宰治ではありません。確かに、『道化の華』は作者の実体験を素材とすることが知られています。しかし、『僕』がどんなに作者の個人的情報をも身にまといても、作品に登場した限り、『僕』は、『僕』語りの部分の登場人物「僕」であり、語り手「僕」です。「語り手」とは、研究者が作品を分析する際の作業仮説です。例えば一人称の語りでは、その登場人物と語り手というように、両者を分

離して考えます。「語り手」概念によって作品外の作者と作品内の語り手を区別することができ、その文学研究上に果たす重要性を認めなければなりません。作者も語りの素材になるということとです。

「道化の華」では、葉蔵の物語と、その物語の書き手「僕」というレベルの違う次元の混在が、あえてわざとやっつてのけられれます。この仕方での小説は書けるのだと、次第に確信をもって行われていくようです。葉蔵の物語の後に続けて「僕」の意見が入り込むという程度を越えて、「葉蔵を、僕を」という並記が現れる、作品の終わりが近づく箇所を見てみましょう。

葉蔵はけふ退院するのである。僕は、この日の近づくことを恐れてゐた。それは愚作者のだらしない感傷であらう。この小説を書きながら僕は、葉蔵を救ひたかつた。いや、このバイロンに化け損ねた一匹の泥狐を許してもらひたかつた。それだけが苦しいなかの、ひそかな祈願であつた。しかしこの日の近づくにつれ、僕は前にもまして荒涼たる気配のふたたび葉蔵を、僕をしづかに襲うて来たのを覚えるのだ。

「道化の華」の書き手「僕」の行動は限られており、今書き進めている葉蔵の物語について様々に意見を述べられるのみです。もっ

とも、どのように否定的な評価を述べても、書かれた部分を撤回するわけではなく、中断した続きを書き加えていきます。語られる出来事はすべて葉蔵に関わる物語として提示されており、葉蔵はこの作品の終わりまで消えることはなく、「僕」に吸収されるわけではありません。そのことを本文が明らかにしているのが、結末近くの「葉蔵を、僕を」という重ねた言い方であり、このあと山を登つて行き、その頂上で海を見下ろすのも葉蔵です。

この作品では、書き手「僕」が見通しを持たず、結末を知らずに書きつつある、ということがはっきり打ち出されています。太宰は、この作品を書く中で、語りつつその中で語りを見出し出して、生成しつつあるテキストという考えを手にしたに違いない。そしてそのことの新しさを確信して、「日本にまだない小説」（川端康成へ）『文藝通信』、昭和十年十月）と言つたのではないかと私は考えています。

私は文学作品の語りについて記述することを試みてきました（「講読近代」という授業で話しています）。そのような方策によつて、文学作品のテキストのあり方へと近づけるのではないかと、散文の文学性について明らかにできるのではないかと。それが私の立場です。文学作品の語りは、通常の言語使用の中での語りとは異なっており、言語使用の新たな可能性として小説の語りを性格づ

けることができるのではないかと考えるからです。文学作品の言葉は、どれひとつなおざりにできません。それらは言語に備わる可能性を極度に引き出したものであるらしく、論じようとするときたちまち途方に暮れることとなりますが、私は何よりも作品を読むというのを研究の源泉とし、その言葉が紡ぎ出されるあり方を精確に記述することに努めてまいります。

春季公開講座（五月九日）

公開講座「京都と蕉門俳諧」

—三つの俳諧遺跡をめぐって—に参加して

三回生 小 栗 瑛 瑚

今回の公開講座では、蕉門俳諧をテーマに田中先生がご講演くださいました。恥ずかしいことに、私は俳諧にあまり詳しくなく、今回のご講演の中心人物である蝶夢という人について、名前を聞くのも初めてでした。田中先生によると、蝶夢は蕉門復興の重要人物であるとのことでした。京都の俳壇には都市系と地方系とあり、蝶夢は最初都市系の俳壇にいたのですが、考え方の違いから地方系に移ったそうです。今回のご講演は、この二つの俳壇のせめぎあいが中心テーマでした。

田中先生が副題とされた三つの俳諧遺跡については、都市系と地方系の説明と絡めて、これらの場所で行われた俳諧の行事を説明してくださいました。まず双林寺では、芭蕉一七回忌に都市系の支考が仮名詩碑を建立し、それを拝むという形で芭蕉を供養する法事と句会である墨直し会が行われたそうです。毎回『墨直し』も刊行しており、蝶夢も六年間継承しています。

続いて義仲寺では、毎年正当忌日に法事と句会である時雨会が行われ、これは現在でも続いているそうです。ここでも『しぐれ会』を刊行しており、六四年分が現存されています。この行事は蝶夢が提示したもので、俳壇の勢力をつけるなどの目的を持たず、純粹に芭蕉の供養を目的とした会でした。これを聞いて、やはり純粹な思いは長く受け継がれていくのだなと思いました。金福寺でも芭蕉を追悼する句会が一回だけ行われます。また、双林寺では墨直し会が途切れた後に、花供養会というものを行い、これも現在まで続いているそうです。

これらの行事と同時進行で、蝶夢と都市系俳壇のせめぎあいは起こります。一七七〇年の三月、蝶夢は墨直し会の主催を退き、住職という職を辞めてまで近づいた義仲寺で芭蕉堂落成供養を行います。ここに純粹に蕉風復興を目指した蝶夢の熱い思いを感じました。そして同じ月に都市系の蕪村が、蝶夢が俳諧指導した凡

董を次期継承者にするという条件で夜半亭の二世を継承します。この関係は、二人ともが苦しかっただろうと思いました。そして、几董を間においてしまった蕪村の気持ちも、きつと複雑なものがあったのだろうと思いました。

これらのせめぎあいの原因を、田中先生は表現理念をめぐってのことだと教えてくださいました。蕪村は言葉の面白さを求めたのに対して、蝶夢は内からこみあげる強い感情を求め、心にあふれるようなことを詠むことこそが風雅の道だと考えたというのです。私には、どちらが良いのかはわかりません。ただ、蝶夢の考えは近代に近い考えが出現したという点で歴史的意義があると説明に納得しました。確かに現代は蝶夢に近い考えが多いように感じます。

今回のご講演で初めて名前を聞いた蝶夢でしたが、彼がした功績を考えると、もっと広く名前が知られていてもよいと思います。しかし名前こそ広がつてはいませんが、純粹に蕉風復興を目指した彼の思いは確かに後世に引き継がれているのではないでしょうか。

『源氏物語』紅葉賀巻の贈答歌と

『萬葉集』の影響関係について

— 額田王と大海人皇子の唱和歌の受容史を中心に —

木 本 有 香

朱雀院への行幸に先立って行われた試案で、源氏は恋い慕う藤壺が見ている中、頭中将と共に青海波を舞い、人々の感嘆の的となる『源氏物語』紅葉賀巻は、華やかな宮廷行事から始まります。この試案が執り行われた翌朝に、源氏と藤壺が交わした和歌を卒論で取り上げました。

（源氏）もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うち振りし

心知りきや

（藤壺）唐人の袖振ることは遠けれど立居につけてあはれと

は見え

この贈答歌には、共通して「袖振る」という、平安時代ではあまり見られない表現が用いられています。この紅葉賀巻の贈答歌について論じた先行研究で、典拠として考えられてきた作品が、『萬葉集』巻一の額田王と大海人皇子（後の天武天皇）の唱和歌（二〇、二二）です。人妻（藤壺、額田王）を巡って、血縁関係に

ある男性（源氏・桐壺帝、天武・天智）が対立するという人物関係の一致から、源氏と藤壺の贈答歌の典拠になったのではないかと考えられてきました。

この説が成立するには、平安時代の人々にとって、『萬葉集』二〇、二一が、額田王を巡つての三角関係が背景となつて詠まれた歌であると受容されていたことが前提となります。先行研究では、紫式部も含めた当時の人々が、『萬葉集』二〇、二一の詞書や歌そのものから（天智・額田・天武）の三角関係を詠んだ歌だと認識していたとの考えでした。しかし、額田王に関する記事が『萬葉集』や『日本書紀』以外になく、額田王を巡つての三角関係を記している資料が、近世より前の時代に見受けられない以上、平安時代の人々が、『萬葉集』二〇、二一を、三角関係の歌として理解してきたのか疑問に感じました。はたして当時の人々が、『萬葉集』二〇、二一を（天智・額田王・天武）の三角関係を詠んだ歌として解釈していたのか、もしそうでなければ紫式部は、どんな意図を以て『萬葉集』二〇、二一の唱和歌を典拠としたのかこの二点を明らかにすることが、私の卒論のテーマとなりました。

まず平安時代の人々も含めて近世より前の時代では、三角関係の歌として受容されていなかったと仮定して、調査を進めました。

しかし、額田王と大海人皇子の唱和歌を「三角関係」の歌として受容していない可能性を示すのに、説得力のある論拠となるものをなかなか見つけられず、苦労しました。

熟考の末、『萬葉集』の中で「袖振る」という表現を用いた歌を分析して「不特定多数の人目を恐れる」袖振りの歌三首に着目しました。額田王の歌も、この三首と同様に、袖を振っているところを大勢の人に見られることを恐れている歌であり、特定の人（天智天皇）の目を恐れている歌、つまり三角関係について詠まれた歌ではないことを、「野守」という言葉に注目して考察しました。

次に『萬葉集』の古注釈を検証した結果、江戸時代初期に北村季吟や契沖によつて、三角関係とは言えないまでも（額田・天武）の關係に天智天皇を加えて解釈していたことが分かり、江戸時代後期の注釈書である『萬葉集燈』から三角関係の歌であるという読み方が浸透していったと解釈しました。鎌倉時代に仙覚が著した『萬葉集註釋』は、語句の解釈に止まっているので、鎌倉時代そして平安時代にも三角関係の歌であるといった考えはなかったと判断しました。また、和歌集や歌学書では、歌枕の「紫野」や枕詞の「あかねさす」の部立に収録されていたため、額田王を巡る三角関係を詠んだ歌として受容されていなかったのではないかと

と考えました。

以上の考察から、額田王と大海人皇子の唱和歌が、三角関係を詠んだ歌として受容されていない可能性が高いと考えました。この結果を踏まえて、紫式部が、どんな意図を以て『萬葉集』二〇、二一を典拠としたのか、再び『源氏物語』に立ち返って考察しました。

源氏の妻の女三宮に宛てた恋文だと分かる柏木の手紙を、源氏が発見し、不用心だと批判している若菜下巻の一場面から、源氏が藤壺との関係が発覚してしまうような歌を典拠にして歌を詠まないのではないかと考えました。万が一、第三者に知られてしまっても、今上帝の妻である藤壺に宛てた恋の歌ではなく、宮廷行事で詠まれた額田王の歌に事寄せて、戯れに詠みかけただけだと言いつつ逃げられるように詠んだのだろうと推測しました。

先行研究で強く指摘されてきたような、人物関係の一致という表面的な共通点だけではなく、藤壺との仲が露見しないための口実であるとの考えを加えて、源氏の用心深さを表現した紫式部の周到な筆致と考えられるのではないかと、というのが結論です。

私の卒論のテーマは大変小さいものであり、結論も画期的なもの

ではなく、一つの考え方を見いだせるのではないのか、という曖昧なものでした。テーマの大きさや結論に拘り過ぎず、丁寧に調査して、筋が通るように構成を考えることを心掛けるだけでも十分卒論になり得ると思います。

四月の下旬から、ある程度下調べはしていましたが、本格的に卒論のテーマにしようと思ったのは、一回目の中間発表が終わった七月頃でした。説得力のある論文にするため、論文に引用する資料を選別して、構成を考える事に苦心し、一番時間を費やしました。その結果、論文の構想がだいたい固まったのは、冬の訪れと同時に卒論の提出日も近づいてくる十一月でした。サークルの練習にも追われ、本当に間に合うのかと戦々恐々としながら、パソコンに向かう日々を提出当日まで過していました。振り返れば、反省点が多々ある卒論でしたが、ご指導くださった先生方や友人達、家族に支えられたからこそ、卒論を完成させることができました。と思っています。論文を執筆するのは孤独な作業ですが、行き詰ったら、先生にご相談したり、友人と話したりして、一人で抱え込まないようにするのが一番大切だと思います。

皆様が充実した学びの成果を発揮できますよう、心よりお祈り申し上げます。

天正狂言本『ふくろふ』における〈あくび〉

駒田 さな

室町時代の狂言を伝える天正狂言本（以下、天正本とする）に収められた狂言の中に『ふくろふ』という曲がある。『ふくろふ』は、鼻に取りつかれた子を山伏が祈るが、祈りは失敗し山伏も鼻に取りつかれてしまうという話である。

天正本『ふくろふ』には「山ふしあくひする。山ふしにもつく。」という場面が存在する。いくつかの台本を比較して、天正本『ふくろふ』の問題の箇所が他の台本ではどう記されているのかを調べたところ、どのような事情かはわからないが、天正本以外の台本にはあくびの要素が出てこなかった。しかし、簡略ながら最も古い形をとどめ、室町時代のあり方を示す天正本にははつきりと〈あくび〉の場面が出てくる。

先行研究では、天正本『ふくろふ』の中の〈あくび〉の意味は、「疲れたり眠くなったりした時自然に口があいて起こる一種の呼吸運動」と述べられている。たしかに『ふくろふ』における山伏のあくびは「一種の呼吸運動」には違いないが、本当にそれだけの意味しか持たないのか。

天正本『ふくろふ』における山伏のあくびを検討しようとして、「験者のあくび」、『三重大学教育学部研究紀要』第六〇巻、平成二二年

三月三二日と題する松本昭彦氏の論文が目にとまった。松本論文では『ふくろふ』は全く検討対象になっておらず、『枕草子』が中心に取り上げられている。松本氏は『柴花物語』『古今著聞集』『癡心集』などにある記述から、「あくびが物の気の去る前兆としての意味をもつ」と述べている。また、松本論文には触れられていないが、同様の理解は早く岡本保孝（一七九七～一八七八）が『柴花物語抄』で表明している。

『枕草子』「すさまじきもの」のおおまかな内容は、験者が物の怪（以下、本論文では「物の怪」と表記する。）を調伏しようと祈念するが、一向に物の怪が退散せず、よりましにも物の怪が乗り移る気配がないので、験者はとうとうあくびをして寝てしまおうというものである。

松本論は、この場面で描かれる験者のあくびが、『柴花物語』『古今著聞集』『癡心集』で見たような物の気治療場面におけるあくびのパロディになっているというものであり、これは一つの捉え方としてあり得るのではないかと考える。

この松本論を踏まえて『ふくろふ』における山伏のあくびについての二つの捉え方を挙げる。

一つ目の捉え方は、『ふくろふ』における山伏のあくびも、『枕草子』における験者のあくびと同じ意味をもつものとして捉え得

るのではないか、というものである。

山伏の祈りの効果があつて、鼻に憑かれた子が、鼻が去る前兆としてのあくびをするべきところなのに、全く効果がなく、山伏があくびしてしまう。その揚げ句に、鼻を退散させる役目の山伏にも鼻が憑いてしまった。そしてその山伏の失敗ぶりに、笑いが生じるのではないか。

二つ目の捉え方は、(あくび)が鼻が憑く前兆現象であるというものである。

『近世のこども歳時記』(岩波書店、平成二年二月八日、飯島吉晴氏の「子供の発見と児童遊戯の世界」『家と女性』暮しの文化史』) 日本民俗文化大系第一〇巻、小学館、昭和六〇年二月二三日) などから、近世には、あくびを物の気などが憑く前兆とする見方があつたらしい。その見方を反映させるなら、『ふくろふ』の場合も、鼻が憑く前兆現象として、まず山伏があくびをし、そして山伏に鼻が憑いた、ということになる。

どちらの捉え方にしても、山伏の祈りの失敗を滑稽に描く中心にあくびが取り入れられている。それは、先行研究の言うような単なる「呼吸運動」という意味にとどまらず、物の気が去るか憑くか、いずれかの前兆現象という意味を背負っているものと思われ。その点を理解しないと、天正本『ふくろふ』の十分な理解が

得られたことにはならないであろう。

また、ここまで考えてきた山伏のあくびがなぜ天正本よりも後の台本では消えてしまったのかという点については、今後の課題として考えていきたい。

在学生の皆さんへのアドバイス

私が卒業論文執筆にあたって大切だと感じたことは、「テーマを限定しすぎず、どんなことも疑問に思ったら調べること」です。小さなことだと感じても、調べてみると何かおもしろい発見があるかもしれません。テーマを限定して関係ないと思うことは調べないのではなく、時間の許す限り広い視野を持って調べるとよいと思います。

また、「友達と協力すること」も大切だと感じました。私は、ゼミの先生にたくさんのアドバイスをいただくと同時に、友達とも何度もお互いの原稿を読み合い、意見を言い合いました。分野を問わず、多くの友だちと論文を読み合うことで、誤字脱字はもちろん、わかりにくい箇所はないか・矛盾している箇所はないかなどを確認し合うことができました。

時間との戦いだと思いますが、友達同士で励まし合いながら、調べることを楽しみながら、頑張ってください。

泉鏡花の唄に関する書誌的研究

芳賀 祐紀子

論文要約

泉鏡花は十六篇の長唄や小唄を執筆し、それらは全集に「唄」として、まとめて収録されています。

彼は叔父に宝生流シテ方松本金太郎を持ち、能・狂言に素材を得た小説を数多く書いています。また作中に謡曲を用いるなどもしています。幼くして亡くした母を懐かしんで子守唄を愛し、かわいがってくれた近所の娘たちから教わった手鞠唄にも関心が強かったと言われています。

このような生い立ちを受け、活発に研究が進められてきた鏡花作品と謡曲の関係性のほかに、近年では謡曲以外の唄に関しても作品の中で効果的に生かされているとした研究が進められるようになってきました。

しかし、全集に「唄」として収録された個々の唄については、これまで取り上げられたことがなく、研究に必要となる書誌的な情報も曖昧になっているものが非常に多いということが判明したため、既存の目録をもとに再度書誌的情報を調査し、集約することになりました。

書誌情報の収集にあたって、まず唄に関する多くの資料を保管

している岩波書店での調査を行いました。岩波書店は『鏡花全集』を刊行しており、全集編纂時に利用した鏡花の自筆原稿などを多数保管していたからです。一章ではこの資料調査の結果を岩波書店編集の「編修資料目録」を補訂する形で報告を行ない、具体的な資料の内容について解説しています。ここでは、目録に記載されていない新資料の存在なども確認でき、鏡花の唄執筆における推敲のあとなども窺うことができました。一章では、「編修資料目録」には記載のない鏡花記念館や石川近代文学館所蔵の資料についてふれ、鏡花の唄に関わる資料が掛け軸などの形で残っている例などもあることを指摘しました。

全集に収められた唄はたった十数篇でしたが、それらの唄は雑誌などの書誌による発表にとどまらず、日本橋の小唄演奏家がまとめた小唄集や映画主題歌として発売されたレコードなどに及び、資料収集がまだ未完全である点が課題として残りました。しかし、本論文には添付資料として、現段階において収集できた各唄の資料をそれぞれ照らし合わせた校異表を作成することもでき、今後の唄研究のその足がかりとなる調査を行うことができたと考えています。

後輩のみなさんへ体験談をお話する前に、まず一篇ですが鏡花

の唄をご紹介します。

しののめ

垣の朝顔

さきつつも

出窓の縁の

とこなつは

其の唇のさゝめごと

まよはせぶりの

あさ霧に

月も見とれて

居るやうな

泉鏡太郎『鏡花全集』巻二十七

（昭和十七年十月二十日、岩波書店）八〇七頁

全集に収められた作品を読み進めるなかで、目にとまったのがここに紹介したような鏡花自作の唄たちです。鏡花と同時代の作家たちで俳句や漢詩などを執筆し全集にも集録されている作家はいますが、小唄や長唄を書いている作家は見当たりませんでした。

なぜ鏡花は唄を書いているのだろうか、鏡花の唄は研究の中でどのように評価されているのだろうか。このような疑問を持ったことが、私の卒論研究の出発点となりました。

論文テーマ探しの一環として調べを進めていくなかで、鏡花の唄に関する先行論文がひとつもないということがわかり、自分が疑問に思ったことは自分自身が実際に調べて答えを出さなければならぬことがわかりました。しかし何も手をつけられていないテーマであったために、通常論文執筆の下調べとして行なうべき書誌研究だけでひとつ論文ができてしまう結果となりました。

後輩の皆さんに大切にしてもらいたいのには、自分が卒論のテーマを決めるきっかけとなった疑問に感じた気持ち、もっと深く調べたいと興味を持った気持ちです。就職活動などと両立して卒論を作っていくと、途中どうしても行き詰ってしまったり投げやりにしたくなってしまう場面が訪れると思います。私自身も内定をいただいたのは卒論提出を終えて一週間後でしたので、一年間卒論と就活を同時進行させていました。そんな中、自分が疑問に思ったことになんとか答えを見つけたという気持ちがあったので、最後まで粘り強く資料収集が続けられたと思います。

自分一人では卒論は書きあげることができません、先生や友人、図書館の司書の方々等をどんどん頼ってください。そして、時間

も限られているとは思いますが友人と卒論を提出する前に回し読みすることをすすめます。自分では全く気付くことができなかった誤字脱字や、よりよい表現を発見することができると思います。提出が迫ってくるとどうしても、焦りや不安が出てくると思いますが、卒論も就活と同じく団体戦だと強く思いました。ゼミ生同士などで情報を共有し合いながら、協力して自分の満足のいく卒論を作りあげていってください。応援しています。

芥川龍之介の児童文学

——区分と姿勢について——

小澤 優里子

◇論文要旨

芥川龍之介の児童文学と小説との異なる点を文体面から定義し、芥川の子どもに対する認識や創作姿勢等、大きな意味での児童文学観を探る。

第一章では、芥川の児童文学の共通点は、一人称でない地の文で「です・ます」調が使われていることと、他の大人向け小説と比較して定義した。これまで先行研究で児童文学と扱われなかった「女仙」に触れ、初出の問題があるが児童雑誌『少年少女譚海』に掲載され、定義に当てはまることも鑑み、児童文学に含まれる

とした。また未定稿の中でも五篇定義に当てはまるものがあり、内容に触れながら児童文学としての可能性があると述べた。そして何故「です・ます」調が共通して使われたのかという背景について調べ、芥川の童話が掲載された『赤い鳥』から三百五十四作品中、常体で書かれた八作を挙げた。八作中一人称でない地の文の常体は四作であり、少ないことが分かった。又芥川が幼い頃読んだ可能性のある『日本昔噺』や『少年世界』に触れ、巖谷小波の敬体のお伽噺を読んだ幼い頃の読書経験から自作の児童文学の執筆に「です・ます」調が反映されたと考えた。

第二章は「家庭に於ける文芸書の選択」という座談会から、「幽霊」や「仇打ち」等を子供が「面白」がるという芥川の発言を引用し、子どもの好みに対する芥川の認識が、自作の児童文学にどのような形で反映されたか挙げた。また「お伽噺を書く」際に「調子を下げないでやらなければ駄目」だという発言もしており、この発言から浜田広介の文で当時の童話の流行を振り返り、芥川の真摯な創作態度が窺えるとした。加えて書簡で童話の一作である「魔術」を「小説とお伽噺との中間」と評している「ことから、子ども向けの童話を書いて」「小説」との「中間」作品が出来るのは、大人向けであっても子ども向けであっても創作態度が変わらなかったことを証明していると考えた。

◇卒業論文体験記

私の場合、国文学科へ入学した当初から近世近代への興味が強く、唯一とても惹かれていた作家というのが芥川龍之介であった。単純に読んだことのある作品がドラマチックで面白いと感じていたからだ。また、私は根っからの児童文学好きであった。そこで三回生の頃から、既になんとなく芥川龍之介の「児童文学」をテーマにした論文がいいと考えていた。

そこから具体的に内容へと踏み出したのは、四回生の四月からである。全集の全ての作品に目を通すことという課題があったため、少しずつではあるが芥川の児童文学以外の作品も読んでいった。また研究対象にしたいと考えていたものの、芥川についての知識もなかったために、まず大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』で芥川についての項目を読み、そこに載っていた参考資料も調べてみた。それから、自分の卒業論文に関連するひとつの先行研究を取り上げ、その論文の内容に細かく批判を加えていくという課題で先行研究をひたすら探していくという作業に入った。その時点でも実は論文の問題点にする箇所がまったく定まっておらず、とにかく芥川の児童文学について調べようという姿勢であった。私の場合の探し方は効率が悪かったかもしれないが、大学のインターネットの雑誌検索で、検索ワードを少しずつ変え

ながら丹念に見ていき、手元にある先行研究に引用されている研究論文にまた目を通して、という繰り返しだった。時間と手間がかかる論文探したが、先行研究に沢山目を通すうちに、この説は間違っているのではないか、という疑問がわいてくるため、卒論の材料となり、土台にとっても役立つ。結果的に私は卒論の半分の量を書くミニ卒論という課題を仕上げるために、九月頭にやっと、先行研究から問題点のきっかけを見つけ、そこからなんとか形になるように、論拠を探しながら実際に書く作業に入った。最初に問題点にしたかった部分から、調べていくにつけ様々な他の問題点や論拠に出来る事項が引つ張られるような形で出てきた。

そこから一二月までは、論拠が客観的に見て不明確ではないかということや、論文形式にとっても気を遣い、友達と論文を読み合ったり形式の正解を探したりしていた。また時代背景について調べて書く必要があったが、どんな先行研究を見つけても他説を自説の論拠にすることとなり、結局自分で雑誌から数える作業をした。分らないなりに、様々な試行錯誤を積み重ねて、論文に反映できるのはその半分だけであつたりするのだ。それでも自分なりに探究心と愛情を持って、研究を進める作業は、全く何も分からなかった初めと比べると、ここまで調べることが出来たという満足感はある。自由に自分の言いたい意見を打ち出し、それ

をまとまった形にできる、卒業論文は貴重な経験であった。

優秀論文発表会に参加して

四回生 野 島 貴 子

優秀論文発表会に参加するのは、昨年引き続き二回目の事です。四回生になって、卒業論文執筆に向けて演習や研究が本格化していく中で、論文作成に対する不安や疑問が募るようになりました。そのような中で、実際に先輩方の論文や、研究過程についてのお話を聞くことができるこの発表会は、私にとってとても貴重な機会でありました。

先輩方の研究や、研究過程でのエピソードは、どれもとても参考になるものばかりでした。特に、近代文学の分野で論文を執筆された、二人の先輩のお話が印象的でした。私自身が近代文学を専攻していることもあり、それぞれ趣の異なった研究内容は、とても興味深いものでした。

芳賀祐紀子先輩の発表は、泉鏡花の「唄」に着目し、資料収集や整理を行った上で、分かったことをまとめていく、という書誌的研究に重点を置いたものでした。芳賀先輩は、当初は泉鏡花の「唄」について、踏み込んだ研究を考えておられたようですが、先行研究がほとんどない分野であったため、研究の土台となる資

料収集が重要だと考えるようになったそうです。全集に収録されているものはもちろんのこと、書誌を離れて、掛け軸や桐箱に書かれているものにも着目し、学芸員の方に問い合わせを行うなどして、時間が許す限り、徹底して資料収集に取り組みました。先行研究が少ない分野では、何から手を付ければいいのか、漠然としすぎていて、研究が滞ってしまうのではないかと、イメージを抱いていましたが、段階をしっかりと踏んで、必要なことを見極めて、資料収集に徹した先輩の取り組みは、素晴らしいと感じました。

小澤優里子先輩の発表は、芥川龍之介の作品の文体に注目し、児童文学作品と小説作品の区分を試みることよって、芥川の児童文学観を探る、というものでした。児童文学として既に区分されている七編の作品を検討し、それらの特徴を把握したうえで、未定稿も含めた他作品にあたり、それらが児童文学であるという意識を持って執筆されたものであるかどうかを検討されています。作品以外にも、作者自身に即した資料にも目を通して、その中で芥川の児童文学観についての論拠を挙げており、とても丁寧で細かな研究がなされているのだと感じました。作品研究をする上で、本文の中から論拠を見付けたり、他作品との比較を慎重に行うことが重要であるということを、先輩の発表を通して実感し

ました。それは、今までに演習で教わってきたことと同じだと思
いました。

新入生歓迎行事 能楽鑑賞会（五月三十一日）

能楽に触れて

一回生 岡 村 優 子

「能楽は古いものじゃない」という言葉に驚いた。舞台は何百
年も前、話し言葉はもちろん古語、着物を着て切った張ったを演
じたりするのに、古くない。それどころか、最先端に行く技術で
演じられているのだという。日本で古典芸能といえ、**「古い」**
ことばかりが重視されて、とりあえず保護しなければという風潮
にあるが、一步踏み出して外国からこうした芸能を見ると「新し
い」ものに捉えられるのだ。この繰り返しの中で、能楽は他の演
劇に新たな芽を出し、能楽自体にも新しい側面を増やしていくの
である。視点を換えることの意味を教えられた気がした。

着付けの説明は目で見る分にも優雅だった。見た目だけでなく、
実際に高価だという衣装は素人目にも艶やかで、舞台上に花が咲い
たようだった。また、着付け一つとっても、羽織り方、結び方、
折り方など、役柄に合わせて多種多様に変わるのが面白い。演者

の動きに配慮した工夫もあって、細かいところにまでこだわる古
典芸能の趣が感じられた。

能には、シテやワキのほかにも、囃子や地謡といった重要な役
割がある。能の観客が舞台に身を入れて観劇するには、演技だ
けでなく、鼓や笛から成る伴奏も大きな要因の一つだろう。何が
始まるのか、どうなるのかという高揚感も、薄氷の上を歩くよう
な緊張感もたった四種類の楽器で表してしまうのには驚いた。能
は目だけではなく、人の耳まで楽しませる芸能なのだ。

狂言では、せひ笑ってください、との言葉に従ってひたすら笑っ
てしまった。何百年前の話であろうと、面白いと思う点は変わら
ないのかもしれない。とほけて何とか謡うことを回避しようとす
る太郎冠者と、その一枚上手に行く主人の掛け合いが絶妙で、爽
快感があった。能には張りつめた典雅さがあるが、狂言には観客
の心をほぐしてリラックスさせ、前向きな気持ちにさせる魅力が
あると思った。

最後に演じられた牛若丸と弁慶の競り合いは、ただただ圧巻
だった。『橋弁慶』の話は有名で、能だけでなく、歌舞伎や文楽
でも演じられている。しかし、話は同じでも、その魅力はそれぞ
れの芸能によって違って感じられるから面白い。特に、今回の『橋
弁慶』は能面を使わずに演じられた。これは珍しいことだそうで、

牛若丸のあどけない表情や、弁慶の雄々しさがひしひしと伝わってきた。

古典芸能は現代の人間、特に私たちのような若い世代にはあまり馴染みがない。それは内容が難しそうだという、自分自身の中にある敷居が高いせいだと思う。しかし、まだ何も見ないうちからそう決めつけてしまうのは勿体ない。新たな楽しみを見つけるような気軽な気持ちで、縁がないと思いついでいる世界に一步踏み出すことも必要なのではないだろうか。こうした文化を受け継ぐ些細なきっかけを大事にしていけたらと思った。

新入生歓迎行事を終えて

一回生 矢島 佑果

私は、今回初めて能と狂言を観賞しました。それまで私は、能や狂言は昔の言葉でのお芝居だから難しそう、見に行ってみたくてチケット代が高そうということで、近寄り難いイメージを持っていました。だから、今回このような機会でも能と狂言の観賞ができるのと知ったときは素直に嬉しかったです。

当日の公演では、最初に能についての説明を聞いたあと、能の衣装の着付けを見せていただきました。着付けは通常では舞台裏でしか見ることができないとても貴重な機会だということで、楽

しみにしていました。能は地味だというイメージを持っていましたが、能の衣装はとても鮮やかな色で美しかったです。同じ着物でも上半身だけ、下半身だけに着る方法があること、役によって着物の柄を変えていること、同じ女面にも種類があることなど、初めて知ることがたくさんありました。口角が下がっていると怖い印象になると教えていただいたので、これからは常に口角を上げた表情をしたいと思います。説明をしてくれた役者さんは、とても面白く説明をしてくださいましたが、目は真剣で、着付けのスピードが最後まで落ちないのを見て、やはりこの人たちはプロなのだと感じました。

次は能で使われる楽器の体験をさせてもらいました。私は大鼓と呼ばれる楽器を体験しました。体験の前に「世界で一番痛い楽器」という説明をされ、少し心配でした。実際にやってみると、一度打っただけで手のひらがじんじんしました。手に響く痛さでした。しかも、コツをつかまないとなかなか音がならない難しい楽器でした。教えていただいた方の顔は汗でびっしょりで、席で見ているときはとても簡単そうに鳴らしていたけれど、実際に体験してその大変さを知ることができました。貴重な体験ができたのだと分かって嬉しかったです。音が会場内に響いたときはとてもスカッとしました。日本の楽器は音が体に響くのが素敵だなと

思いました。

そのあとに狂言の説明を聞き、続けて「寝音曲」という狂言と、「橋弁慶」という能の一部を見せていただきました。「寝音曲」は、とても短い狂言でしたが、一気にその世界に引き込まれました。現代でも通じるとも面白い内容で、笑いは昔も今も同じなのかなと思います。役者さんの歩き方、一つ一つの動作、音の立て方にとっても魅力を感じました。狂言についての説明の中で教えていただいた「笑い」も劇中に出てきました。本物はやはり迫力が違って聞こえました。実際に見たことで、狂言って面白いんだと思えることができました。「橋弁慶」は、狂言とまた違った空気が流れていました。衣装の着付けを見た後だったので、牛若丸と弁慶の衣装も楽しみながら見ることができました。激しい動きが多く、力強さの中にも美しいと感じる点がありました。

今回公演を見て、日本はこんなすごい文化を持っているのだと感じることができました。他にも色々、日本には素晴らしい伝統文化があるのでと思うと、わくわくして鳥肌が立ちました。この公演のおかげで日本の伝統文化に興味を持つことができました。貴重な体験ができて嬉しく思います。本当にありがとうございます。

二〇一三年度 論文題目

修士論文

酒吞童子作品における外国性

北浦 由希

—現代の場合を中心に—

『源氏物語』における准拠と「歌ことば」について

柴田 清子

『源氏物語』紅葉賀巻の贈答歌と『萬葉集』の影響関係について

—額田王と大海人皇子の唱和歌の受容史を中心に— 木本 有香

『源氏物語』類纂にみる独自の表現と法則 芝本 奈保実

初瀬観音をめぐる女君—孝標女・浮舟・玉鬘— 竹端 紀子

『和泉式部日記』における聴覚的表現とその意義 鶴田 ひとみ

—女と帥宮の間に響く音・声—

姉弟の逆転 中川 真歩

—『古今和歌集』仮名序における素戔鳴尊と天照大神—

かくや姫と女大将の昇天の仮説 一色 純穂

—『竹取物語』と『とりかへばや物語』—

葵巻における哀悼 矢野 真依子

—潘岳「悼亡詩」とのかかわりにみる—

上代

逆言・狂言考

萬葉集相聞における表現の変遷

井上 雅美

—「思ふ」と「恋ふ」の関係性を中心に—

萬葉集一九四番歌における「柔膚」について

白羽 瑠菜

萬葉集の色彩表現—紫を中心に—

田口 真帆

萬葉集七夕歌における「月人をとこ」

寺川 由希子

中古

萬葉集相聞における「黒髪」の表現について

西村 花織里

紅葉の「黄葉」

若原 紫帆

高田女王の作歌七首

吉越 あゆみ

山口女王、大伴家持に贈る歌六首

中 詩織

萬葉集に見られる数量表現

松岡 由香里

篁冥官説話について―井戸を中心にして―

恋歌の二条院讀岐

『小男の草子』考

―小男と周辺の人々に焦点をあてて―

明治以降における『桃太郎』の変化

―巖谷小波『桃太郎』をはじめとして―

日本昔話『天人女房』と『グリム童話集』の比較

―異類婚姻譚という観点から―

狂言『枕物狂』の構想

―能『綾鼓』『恋重荷』と比較して―

狂言台本に見る接尾語「ども」の用法

天正狂言本『ふくろふ』における〈あくび〉

『易経』からみる末子成功譚

『古今著聞集』六八二の一考察

狂言『神鳴』の源流

―日中の雷神説話の検討を通して―

平安・鎌倉時代の物語に見る菓子について

『建礼門院右京大夫集』執筆論

―平家一門との関連―

都における鴨川存在―女人禁制のない水源地―

『宇治拾遺物語』「雀報恩事」考

覚一本『平家物語』における平知盛像について 中島友理

『今昔物語集』巻第三十一「北山の狗人を妻と為す語第一五」について

―『瀟湘録』との比較・検討―

姥皮型説話と『花世の姫』『うばかは』比較

番外謡曲『花盗人』考―和歌から謡曲へ―

『源氏物語』「宇治十帖」における七夕伝説

―渡河の主体を中心に―

『方丈記』大地震の表現をめぐって

御伽草子『浦島太郎』における玉手箱の解釈

『ささやき竹』の一考察―略本系を中心に―

「フルサト」および「フリニサト」

―大伴旅人と大伴坂上郎女の比較―

京都古知谷阿弥陀寺本『彈誓上人絵詞伝』について

狂言『因幡堂』から見る女性の姿

狂言「首引」における鬼について

長崎県島原半島の河童

高松未奈

辻野夏海

中島友理

中村美咲子

松井香織

丸井しずか

三好里佳

吉川実穂

安東裕美

井之口紫乃

塩川綾乃

鈴木瀬菜

尚山由佳

中津朋子

中村栞

—(雲仙三太郎カッパ)を中心として—

近 世

『生玉心中』考

—おさがとおきはを中心にする人間関係—

深 浦 愛

『雨月物語』「吉備津の釜」考

—磯良の女性像と変貌について—

秋 田 桃 子

『長町女腹切』考—叔母の人物像を中心に—

『好色五人女』巻一「姿姫路清十郎物語」考

—作品の中に描かれる女性像—

一 関 志穂子
稲 木 彩

『女殺油地獄』における与兵衛像の再検討

—周囲の人々を視野に入れて—

植 田 詩 帆

『一休ばなし』考—巻之二・第八話「女の死がいをかも川へながす事
付仏果を得る事」における素材と効果—

幕末女流歌人野村望東尼の家集『向陵集』考

—家集にみられる望東尼の特色—

上 村 理 子
大 山 千 晶

『心中天の網島』における「阿呆」役三五郎の(笑い)について

『東海道四谷怪談』論—お岩の「変化」と「悪」—

『心学早染草』考—山東京伝の工夫—

奥 田 春 菜
尾 崎 美 月
梶 原 宏 美

『桃太郎昔話』考—物語の中になされている工夫—

『和漢鼠合戦』における工夫

『心中天の網島』考

—叔母の人物像と作中での役割について—

岸 岡 香 澄
木 村 真 理
玖 村 早 知 子

『鐘の権三重帷子』考—おさあみの人物像について—

『心中天の網島』考—おさんの人物像について—

『死霊解脱物語聞書』考

—累の物語が読まれた理由—

「大晦日はあはぬ算用」考

—西鶴諸国はなし』巻二の三における人物像の矛盾について—

『好色一代女』考

—当時の女性の生き方、考え方、その描かれ方について—

近松心中物考—死の描写にみる近松の手法—

『冥途の飛脚』考—忠兵衛の人物像—

『心中天の網島』考

—治兵衛の人物像とそれにもみる近松の工夫—

『武家義理物語』における義理と人情

—「死なば同じ波枕とや」(巻一—五)を中心に—

異界に入る女性たち

—「西鶴諸国はなし」巻二「水筋のぬけ道」を中心に—

橋 本 美 咲
藤 原 奈 々

「蛇性の姪」考—人物造形と主題をめぐって—

『心中宵庚申』考

—心中に至る要因と主人公半兵衛の意図—

『心中天の網島』考

—「女同士の義理」と子供を描き方—

『心学早染草』考

—悪玉を描く上での京伝の意図と工夫—

『心中宵庚申』論—半兵衛と三つの「家」—

『心中天の網島』試論

—「賢女」とおさんの心情をめぐって—

『人間一生胸算用』考

—江戸市民の娯楽・京伝の工夫—

近代

広介童話論—アンデルセンと比較して—

坂口安吾「青鬼の禪を洗う女」論

小川未明「金の輪」論

夏目漱石「坊っちゃん」論

—生活環境の作品への影響について—

芥川龍之介の児童文学

松下 兎子

山名 梨沙

若江 美香子

川崎 りえ

田中 玲美

丸山 那都未

南塚 紗都美

浅野 生子

東 園子

飯島 麻友

奥村 亜加根

小澤 優里子

—区切りと姿勢について—

「was born」からみる吉野弘が抱く親子像

遠藤周作「わたしが・棄てた・女」

—森田ミツの人物像—

童話による自己表現

—新美南吉童話における〈悲しみ〉—

長野まゆみの〈変身〉—〈少年〉と〈女性〉—

岡本かの子「老妓抄」論

—「華やくいのち」の実体—

夢野久作の犯罪学

「手袋を買ひに」を中心に見る南吉の親子観

梶井基次郎「ある崖上の感情」

—怒から見える「生」と「死」—

未明作品にみられる他作品の影響

—「赤いろうそくと人魚」と「人魚姫」の比較を通して—

宮沢賢治〈理想〉の〈きようだい〉像の変化とその矛盾

—「双子の星」と「手紙四」を中心に—

「鳥の北斗七星」考—大尉の祈りと泪—

「件」「冥途」における内田百閒

「算の話」の「暗黒の絶望」と死

齋藤 麻衣

佐野 菜摘

柴田 結可子

中谷 瑞希

橋本 聡美

長谷川 汀紗

前田 里穂

間曾 柚季

松尾 あゆみ

水上 文乃

門下 智穂

吉永 恵子

細川 涼子

「うつけみ」論―雪子の狂気について―

井場 愛子

泉鏡花『日本橋』とその装幀家・小村雪岱

今村 綾

樋口一葉「花ごもり」論

兼重 有希

―題名の意図と〈出世〉に関する考察―

「赤い部屋」論―「途上」と比較して―

川上 瞳子

清水紫琴「こわれ指環」論

川原 志織

―女性像の比較を中心に―

「十三夜」論―女性像に込められた一葉の意図―

古賀 莉彩

「十三夜」論―高坂録之助の造型と登場意義―

鳥津 美香

「海辺の光景」論

清水 美里

―「心の中に欠落している何か」とは―

「二人比丘尼色懺悔」文体論

伊達 歩実

谷崎潤一郎「春琴抄」論―春琴の音曲論について―

寺田 早希

「桜心中」論―影響を与えた作品について―

杜氏 麻記

泉鏡花「外科室」における麻酔剤

福井 佐知子

―うわ言を発するとは―

「山月記」の結末に滲む作者中島敦の希望

森山 友佳理

桜んぼを襲った「黒い巨きな靴」の正体

桂 千尋

―金子みすゞ作品研究―

泉鏡花「龍潭譚」論―終幕の場面を中心に―

隈元 千裕

―終幕の場面を中心に―

樋口一葉における一人称独自体について

小畑 文乃

「霞に裏」における女教師の造形

中林 未久

―小川未明の女性観考察―

「婦系図」論―着物から見る相関性―

野澤 佳恵

泉鏡花の唄に関する書誌的研究

芳賀 祐紀子

江國香織『ホリー・ガーデン』論

福澤 ゆり子

―個人に即すという事―

有島武郎の「カイン」観

前田 明子

「火星の運河」論―理想と現実―

横田 奏絵

国 語 学

福井県におけるアスペクト表現の調査研究

稲津 希

「「つんた」「てんた」「てもた」「てもた」について―

副詞「てつきり」の意味用法について

大原 桂子

愛媛県旧西条市における「消える方言」と「消えない方言」

大平 理恵子

小新聞「仮名読新聞」にみるふりがなについて

沖田 麻友

源氏物語の現代語訳

奥田 智恵理

―訳率から見た『新訳』と『新新訳』―

「いらっしやる」の意味で使われる「おられる」という語についての考察

— 国会会議録事録から —

複数を表わす接尾辞「ドモ」「タチ」「ラ」

— キリシタン資料を中心に —

宿に関する語とその語誌

— 『蘭西洋道中膝栗毛』の例を中心に —

類義語の記述的研究「下車」と「降車」

『萬葉集』巻八橘朝臣奈良麻呂結集宴歌

— 題詞「結集宴」は「結十集宴」か「結集十宴」か —

栃木方言における当為表現「ヨウダ」についての調査研究

「ムス」と「フカス」の記述的研究

— コーパス『KONONHA 少納言』を利用して —

「すぐに」「ただちに」「たちまち」の記述的研究

ヤハン・ヨナカ・ヨハの表す時間

日本語自然会話における「割り込み」の考察

— 「割り込み」後の展開について —

自筆原稿による推敲過程の研究

— 『眠れる美女』の場合 —

ら抜き言葉の使用意識・実態についての調査研究

田中真奈

— 小学校・中学校の教育現場を視点に —

野口雨情の童謡について

文学における京言葉

私たちの生活の中での二人称とその今後

— 京都女子大学の学生へのアンケートより —

福井の方言について — 越前方言の現状、使用状況 —

外来語の使用 — アンケート調査をもとに —

オノマトペの変遷

— 新聞連載小説から辿るオノマトペ —

若者言葉の生成と消滅

小学校国語科の教科書におけるオノマトペの特徴

小中学生の敬語使用の現状

— 小中学生へのアンケートを参考に —

和製外来語について — 学内アンケートの結果から —

名前における漢字の読みについて

— 奇抜な名前から見る漢字の多様性 —

大阪府の方言の現状

— 中学生へのアンケートを基に —

和歌山方言の現状

— 中学生へのアンケートをもとに —

五十嵐 結莉

石田 茉伊

岡 祥子

勝木 礼華

川嶋 茜

久保 茉莉花

毛戸 咲有実

佐々木 菜美

杉本 千明

鈴木 香理

相田 百花

中馬 希

中口 真由美

奈良県北部の方言について

—現代の若者の使用状況と方言意識—

中谷 千香代

「バイト敬語」の使用について

—京都女子大学生へのアンケートをもとに—

中本 未紗

新たな意味を持つ副詞的表現について

—京都女子大学生へのアンケート結果をもとに—

西口 沙希

和歌山県（田辺市）の方言について

—高校生へのアンケートより—

葉糸 早也香

静岡方言の研究—アンケート調査の考察を中心に—

畑友里恵

現代文学におけるオノマトペ

—児童書と小説との比較を中心に—

原田 知美

振り仮名について

—現代における機能分析を中心に—

藤田 紫帆

大阪（北部）方言の使用状況

—高校生を対象としたアンケートをもとに—

森川 紗織

擬情語における助詞「と」の出現について

山本 晴加

若者と「流行語」

—アンケート結果の分析を中心に—

米倉 茉莉子

日本語表現における「聞きなし」

—聴覚に関係する表現について—

五十部 美季

『女子大國文』投稿規定

一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたもので可)。

- ② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたもの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること)。

五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧で記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授)(本学大学院博士後期課程(本学文学部国文学科四回生)などと記す。

- ② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用す

ることはしない。

六、(投稿先)

投稿先は以下の通り。

〒六〇五―八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌一部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、

採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

十、(掲載論文の著作権及び電子媒体による公開)

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピュータネットワーク上で公開することがある。

十一、(規定の改正)

- ① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。
本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。
本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

編集後記

今号の査読委員は次の方々です。

大谷俊太・田上稔・峯村至津子・宮崎三世・山崎ゆみ

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読の結果を報告、審議の結果、四点が掲載となりました。それに加え、新刊紹介一点を掲載しております。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

(宮崎・山崎)

女子大國文

第百五十五号

平成二十六年九月十五日 印刷

平成二十六年九月三十日 発行

〒606-8601 京都市東山区今熊野北日吉町壹番地

編輯兼
発行者

京都女子大学国文学会

電話 〇五―五三―一九〇七六

FAX 〇五―五三―一九一二〇

振替 〇〇八〇―五―三二四

〒600-1604 京都市上京区上長者町通黒門東入

印刷所

西村印刷株式会社

電話 〇五―四一―四一〇八代

FAX 〇五―四三―一六二八二